

「戦後日本におけるフレンズ国際ワークキャンプの展開」

第 22 期第 3 研究 郷戸 夏子（東京外国語大学）

1. 研究の背景と目的

本研究では、1950 年代の日本において、アメリカ・フレンズ奉仕団（AFSC）によって展開されたフレンズ国際ワークキャンプ（FIWC）の活動実態と意義を解明するものである。戦後、AFSC は日本においてララ物資の分配において中心的な役割を果たし、その後 1949 年からは独自の活動として、国際学生セミナーを実施した。フレンズ国際ワークキャンプは、それに続く独自の和解プログラムとして 1940 年代後半に展開された。本報告では、この活動がいかに当時の日本の社会課題（差別、貧困、災害など）に向き合い、若者の主体性の構築や土着化していったのかを考察することを試みた。

2. ワークキャンプの起源と日本での始動

ワークキャンプのモデルは、第一次世界大戦後の欧州における復興支援と若者の自発的奉仕活動を起源とする。日本では 1949 年頃、フロイド・シュモーによる「広島平和の家」建築や、フレンド派の若者による整地活動やペンキ塗り衣料修繕などがその原型となった。1950 年代に入ると、AFSC からジャクソン・ベイリーなどのディレクターが来日し、より活動は組織化された。そのため、埼玉県「子供の町」での活動や 1953 年の滋賀県水害地救援を経て、1954 年には香港へ日本人学生を派遣するなど、活動は国際的にも拡大した。

3. FIWC の理念と活動の多様化

FIWC の理念は、単なる労働奉仕に留まらず、「人間は皆兄弟」という考えのもと、異なる背景を持つ人々が共に働くことで相互理解を深め、社会問題を身近に考え、活動する場を提供することでもあった。1956 年に FIWC が正式に設立されると、関東・関西を中心に週末キャンプや長期キャンプが頻繁など様々なワークキャンプが実施されるようになった。活動場所は児童養護施設、障がい者施設、被差別部落、ハンセン病施設など多岐にわたり、社会の要求に応えつつ、さまざまな問題解決の手法を実践した。

1950 年代後半、AFSC は活動の「土着化」を理由に資金援助の打ち切りを通告した。これにより活動は日本国内の各拠点（関東、関西、広島、福岡）へ引き継がれ、独自の活動へと展開された。

5. 今後の展望

今後は、当時の若者を惹きつけたワークキャンプの独自性を他団体との比較から整理し、具体的な交流実態を検討する。また、AFSC の関心が日本から他国へ移る中での位置付けや、フレンド派からの独立後日本の活動においてフレンド派がいかなる影響を及ぼしたかを明らかにしていきたい。